

② まちそだて 地域を教育る

日の出舎夜間小学校から

久保田武男

一 五一歳の新入生

「私ハ、字ガ読ミ書キデキナイタメニ、ドンナニ辛イ苦シイ思イヲシタカワカラナイ。ソノ思イニ比ベタラ今カラ字ヲ習ウ苦シサ、恥ズカシサナンテ比ベモノニナラナイ。ダカラ、私ハ今カラ字を習イタイ」

Sさんが学級に入ってきたのは五一歳の時。

彼女は生まれてすぐに風邪による高熱で脳細胞の一部を破壊され脳性マヒを持つ。身体が極端に細く、鉛筆を握る握力がないためにジューターの上にペタンと腰をおろし、両手で鉛筆を握り、足のヒザで操作して書く。八マスのノートに仮名文字書いても一マスに入りきれない。「あ」と書いても「あ」か「お」か「す」か見分けがつかない。その一字を書くのに額に汗を浮かべ一五分ぐらしかかる。そんなSさんに「これでは練習するしかないから、毎日少しずつ字を書いてみて下さい」

と書いておいたら、次の日から毎日一ページ一時間半もかかって字の練習を繰り返し、次の週に見せられたノートには大きな字がぎっしり埋まっていた。そして、目を見張るほどに文字が文字らしくなってきた。

彼女は言語障害がひどく、慣れた人ではないと言葉がわからない。字が書けるようになるということは、彼女にとってとても大きな意味を持つ。

二 勉強シタイ

Sさんが学級に入って三カ月経ったある日、突然勉強を辞めたいと言いだした。理由は、彼女が夏休みの一週間家に帰り、休みの間も毎日教科書とノートを出して勉強している姿を見て八〇歳の父が

「今から勉強したって何になる。どうせ、お前なんか役に立たないんだからやめちまえ」

- 一 五一歳の新入生
- 二 勉強シタイ
- 三 厚い壁
- 四 社会を教育る
- 五 「ふきのとう」のように

と言われたそう。彼女にとっては相当にショックだったようだ。彼女は言う。

「私ハ、四八歳マデ家カラ一步モ外ニ出シテモラエナカッタ。国家公務員ノ父ハ、自分ノ子ニ障害者ガイルコトヲ知ラレタクナクテ、私ヲ外ニ出サナカッタ。母ガ亡クナリ、私ハ自分カラ希望シテコノ施設ニ入レテモラッタ。ココニ来テ、初メテ外出モ、家族以外ノ人ト口ヲ聞クコトモデキタ。セツカク勉強モ始メタトコロナノニ父ハヤメロト言ウ。私ハ、本当ニ悔シイ」

わかりにくい言葉で一生涯懸命に言う。

そのことについて二時間目の授業で全員で話し合った。Sさんよりもっと障害の重いDさんがヨダレを垂らしながら言った。

「ワ：タ：タ：シ：ハ」

（私は間違っていると思う。私達だって普通の人と同じように勉強して良いはずだ。生まれてきた以上字を書いたり読んだりできて良いはずだ。Sさんは間違っていない。たとえお父さん

でも勉強しなきゃいけないなんて言っはいいけないと思う。Sさんはここで勉強やめちゃいけない。

皆も同じ意見だった。皆にも同じ体験がある。学校に行きたくとも行かせてもらえなかった者にとって、字を読み書きしたくても教えてもらえなかった者にとって、これはどれほど大きな意味を持つことだろう。憲法でも教育基本法でもはっきりと教育を受ける権利を謳っているはずなのに、皆にとっては受けてきた現実の方が大きい。

Sさんにとってそうであるように、家族とその家族を取り巻く近所・社会の偏見と無理解がSさんのお父さんのような発言をさせる。

障害者であろうとも教育を受ける権利は保障されているはずなのに、それを知っているのが制度をつくる側よりも、Sさんのような障害者自身であるという現実はあまりにも悲しい。

三——厚い壁

ある日、朝日新聞から取材の申し入れがあった。取材に応じるか否かを学級で話し合った。ほとんどの学級生は否定的な意見が多かった。

「この年齢で小学生の勉強をしているのは恥ずかしい」「新聞に顔や名前が出たら親や兄弟

に何と言われるかわからない」「世間の人からかわいそうだと思われるのはいやだ」というのがその理由だった。

「しかし、本当にそれで良いのだろうか？学校に行けなかったのは皆だけなんだろうか？何十年間も家から一歩も外に出してもらえなかったのは皆だけなんだろうか？そして、今も家から一歩も外に出してもらえない人はたくさんいるのではないだろうか。そんな人達にその家族の人にこの夜間小学校のことを知ってもらう必要はあるんじゃないだろうか」と皆に問いかけてみた。それまでずっと下を向いていたSさんはしっかりした目で顔を上げキツパリと言った。

「私ハ新聞ニ出テモヨイ。私ハ、四八年間、家ノ壁ノシミノヨウナ生活ヲシテキタ。私ダケデタクサンダ。他ノ人ニ、コンナ思イハサセタクナイ。私達ノコトヲ、今、家ニイル障害者ノ人達ヤ、ソノ家族ノ人達ニ知ッテモライタイ」Sさんの想いは皆にも共通しているものだった。その一言で全員が取材に応じることを承諾してくれた。

記者は、取材に当たってとても細かい配慮までしてくれ、あたたかい記事を書いてくれた。新聞に載ること、その親・家族からどのような反応があるかが当人はもちろん、我々、施設、

記者にとっても大きな関心だった。記事が載った週の日曜日、Sさんのお父さんが施設のSさんを見かねてきた。そして、Sさんに会うなり

「新聞を読んだ。お前は、良くあそこまで勉強できるようになった。我家で新聞に出たのはお前だけだ」と言って誉めてくれたそうだ。

「才父サンニ誉メラレタノハ、生マレテ初メテ」

と目を輝やかして言う。ところが、数日経ってお姉さんから電話があったそうだ。

「なぜ、あんな目立つことをするのか。嫁ぎ先でも近所の手前もとても肩身の狭い思いをしている。家には、そろそろ嫁をもらわなければならない年頃の息子がいるので、お前が目立つようなマネはしないで欲しい」

その電話を受けて、彼女は涙を浮かべて言う。

「私ハ、今マデ才父サンヤ兄弟ノ言ウコトヲ聞イテ、黙ッテ生キテキタ。家ヲ離レテ、施設デ暮ラシ、自分ノ考エデ勉強モ始メタンダカラコレカラワ自分ノ思イデ生キテモ良イト思ウノニ……姉サンハ、マタイケナイト言ウ」

彼女は知っている。決して、その壁が家族の無理解だけから来る壁ではないことを。お父さんが四八年間家から一歩も外に出さなかったの

も、お姉さんにあのような発言をさせるのも、「近所」という身近で残酷な壁があり、さらにその後には「社会」という厚い厚い壁があることを。そして、何よりも辛く苦しい思いをしているのは父も姉も同じだということを。

四——「社会を教育する」

ある日、数人の学級生と街のデパートに買物に行った。

やさしい本を買いたいからと、Sさんと車イスの一人が本売場に行った。そこには、車イスの入り込む余地のないくらいの人々が雑誌を立ち読みしていた。その中に車イスで割り込み希望の本を捜していたところ、近くにいた人たちがチラッと車イスの方に目をやり、一人立ち退



き、二人立ち退き、やがてその売場には誰もいなくなってしまった。

これにはさすがに私も腹を立てしきりに怒っていた時に、その車イスの人はやさしく言った。

「オー……オー……ラー……ナイ……デ……」

(怒らないで下さい、私達は慣れていません。小さい時から何回となく今のようなことを経験しています。私達が悪いんです。今まで外に出なかったから。初めて見る人が驚くのは当然です。これからは僕たちが社会を教育ていかなければいけないと思います。)

その人は車イスの上で不自由な身体をよじりながら一声一声話していく。一五分もかけてその一言を言い終る。しかも、その言葉の裏にやさしさとおたたかさを感じさせながら。

「社会を教育する」——「社会」が健常者だけのものではなく障害者も子供も老人も共に住むところであるのなら、そのすべての人達が街づくりに参加し、すべての人の声を反映させることのできる街づくりを目指さなければならぬし、その中ではすべての人が教師であり生徒であるはずである。

車イスにとっての「街の段差」は道路との段差よりも「心の段差」である。なぜなら道路を

作るのも学校を作るのも人間であり、規則を作るのも制度をつくるのも人間であるのだから。

もし、道路のすべての段差がなくなったらとしても人の心が変わらない限り街を安心して歩けるようにはならないだろうし、仮に多少の段差があったとしても街の人の心に段差がなければ自由な、街を歩くことはできるだろう。

「社会をつくる」とは「共に教育とう」とする姿勢であり努力ではないだろうか。車イスのその人がそのことを教えてくれた。

五——「ふきのとう」のように

日の出舎夜間小学校を「ふきのとう学級」と呼んでいる。

凍りつく大地の下でじっと春を留意するのは小さなひとつひとつのふきのとうであると信じている。そして、この冷たく凍る社会の根雪が溶かすのも学級生一人ひとりの生きていく姿であると信ずる。

Sさんは言う。

「私ハ、字ガ書ケルヨウニナッタラ、私ノ今マデノ人生ヲ書イテミタイ」

△東京都秋川市、ボランティアサークル
「花咲き村」村長▽